



ワーグナーの政治性、または非政治性について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 嘉啓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00010037

ワーグナーの政治性、 または非政治性について

伊 藤 嘉 啓

(1)

ワーグナーのドレスデン時代のもつとも大きな体験は、なんといつても、1849年のドレスデン暴動への参加であつた。作家で、これだけの直接行動にでた人は、あまり多くないであらう。ドストエフスキーは一じ、死刑の宣告をされ、のちシベリア流刑に減刑されたのであるが、原因は比較的穏健な政治サークルに顔をだしたからにすぎなかつたし、ハイネはペン先だけの「進歩的文化人」であつた。たゞ、ワーグナーと同 年うまれのビューヒナー (Georg Büchner) だけは、ワーグナーよりも15年もまへに、農民に蜂起をすすめるパンフレット (ヘッセンの急使) をくばつた科で、ワーグナーと同様、国外に亡命してゐる。

ワーグナーは芸術家としては、まれに見るほど政治的であつたとおもはれるが、通説はワーグナーをどこまでも、非政治的であるときめつける。まづ、トーマス・マンである。

(1) 「本質的に政治的人間であることを、ワーグナーはいつも拒否し、政治結社の活動にたいする反撥を、かくしたりはしてゐない」

(2) 「ゾラとワーグナー、ルゴン・マカールの象徴的自然主義とワーグナーの芸術とのあひだには、多くの時代的な共通点がある... しかし、本質的・典型的な国民的相異は、フランスの作品の社会精神とドイツの作品の神話的・原詩的精神とである。... ドイツ精神は、社会面や政治面には、ほん

らい無関心であり、もつともふかいところにおいては、この領域はドイツ精神とは無縁なのである」(いづれも、Th. Mann: *Richard Wagner und der Ring des Nibelungen*.)

つぎに、現在のワーグナー研究者の代表の一人と目されるヴェステルンハーゲン (Curt von Westernhagen) も、「ワーグナーは夢想家 (Phantast) であり... この人物と政治について話はしたが、まったく行動をともにしてはゐない」といふバクーニン (Michail Bakunin) のことばを引用し、さらにドレスデン時代のワーグナーの蔵書に、マルクスやエンゲルスの著書、そのほか、とにかく政治に関する本はまつたくなかつたといふ理由から、ワーグナーは根本的に、非政治的であつたと結論してゐる (Westernhagen: *Richard Wagner-14. Kapitel*).

もう1つ、日本の文献からの例をしめせば、

「彼はこのザクセンの革命運動に参加せよとの党派にも属してゐるわけではなかつた。社会主義も共産主義も彼の関するところではなかつた。彼はまた共和黨員でも民主黨員でもなかつた。およそ彼ほど非政治的な人間はないのである」(相良守峯『ワーグナーの思想と芸術』)

(2)

ワーグナーはいつまでも自分の芸術をうけいれてくれない社会に不満をもち、このやうな社会の変革をのぞんだのであり、ワーグナーの革命への関心は、芸術的でこそあれ、つまるところ政治的ではない、とされる。しかし、ワーグナーと革命とのむすびつきは、なにも1849年、年齢でいへば、35歳のときになつて漸くはじまるのではない。それは、ワーグナーがギムナジウムの生徒であつた1830年までさかのぼり、ワーグナーは18歳、もちろん、まだ芸術活動は始まつてゐない。この年の復活祭に、ワーグナーはニコライ学校を退学、6月16日、トーマス学校に転校してゐる。ニコライ学校をやめて、トーマス学校にはひるまでの春休、ワーグナーは義兄 (姉ルイーゼの夫) で、

出版社を 経営してゐた フリードリヒ・ブロックハウス (Friedrich Brockhaus) から校正の手伝をたのまれ、引きうけてゐる。それは、中世史とフランス革命に関する本であつた。ワーグナーが政治を取扱つた書もつを、はじめてよんだのは、このときである。さうして、約 2 ヶ月ごとに、フランスに革命がおこつた。7 月革命である。

1830年の選挙で、反王党派の自由党員が多数選出されると、反動的な国王シャルルは、7月23日、まだ召集されてゐない議会を、勅令によつて解散、選挙権を極度に制限しようとしたのに、一般民衆が反撥したのである。王はイギリスに亡命した。これは、保守反動の砦であるウィーン体制にはひつた最初の亀裂として意味をもつ。

この7月革命がワーグナーにあたへた影響は大きかつた。ワーグナーは『わが生涯』のなかで、

「ライプツィヒ新聞の号外が、パリの7月革命を報道した。フランス王は玉座から追払はれたのだ。… 歴史的世界は、わたしにとつて、この日からはじまつた。もちろん、わたしはこの革命に大賛成だつた」(S. 52) と書き、『自伝のスケッチ』にも、「一挙に、ぼくは革命家となつた。政治的文士とつき合ふのだけが、たのしかつた。ぼくは政治的なテーマをあつかつた序曲を書きはじめた」と、いつてゐる。(たゞし、この序曲、いまは残つてゐない。)

7月革命はヨーロッパ全土に波及した。(1) ベルギーがネーデルランド王国(オランダとオーストリア領ネーデルランドが合体して出来た王国で、ウィーン会議で誕生)から独立し、(2) ポーランドのワルシャワには、革命(11月革命)がおこつた。ナポレオンの作つたワルシャワ大公国は、ウィーン会議で消滅して、そのかほりに、ポーランド王国が成立したが、ロシア皇帝がポーランド王を兼ねてゐたのである。ワルシャワの革命政府は、ロマノフ王朝の廢位を宣言したが、1831年9月、ロシア軍はワルシャワを占領し、ポーランドの蜂起はをはつた。9月8日であつた。

このポーランドの革命は、7月革命そのものよりも、ワーグナーには、よ

り身近かな事件であつた。ワーグナーは、『わが生涯』のなかで、この蜂起にふれて、

「ポーランドの人民が、短時日にせよ、1831年5月に、たゞかひとつたところの成功に、わたしは驚喜した。新しい世界が奇蹟のやうに、あらたに生れたかのやうにおもへたからである。それに対して、東ロレンカでの戦ひの報道（革命軍敗退）では、あたかも、この世界が、またもや消えてしまつたかのやうな気がしたのである」（S. 74）と、書いてゐる。

ワーグナーにとって、ポーランドの革命は、遠い世界の抽象的な出来事ではなかつた。肌で感ずる具体的な事件であつた。この革命に、ごくわづかではあるけれども、ワーグナーは直接に接触する体験をもつたからである。革命の失敗者たちが、そのころの「自由の国」（と、おもはれた）フランスへ亡命の途次、ワーグナーの住むライプツィヒの町を続々と通りすぎていつたからである。ワーグナーはこの難民の宿泊所をたづね、この人たちと会話までもつてゐる。

（3）

ワーグナーが生涯において、一ばん政治的であつたのは、ドレスデン時代であり、1849年のドレスデン暴動への参加といふ形で、頂点に達する。しかし、突如として、そのやうな直接行動があつたのではない。それにはそれなりの助走期間があつたのである。

ドレスデン時代のワーグナーを、政治運動に引きこんだのは、レッケル（August Röckel, 1814—76）である。1843年2月、ワーグナーがドレスデンの宮廷指揮者（Hofkapellmeister）となつたとき、レッケルはその下ではたらく副指揮者（Musikdirektor）であつた。レッケルはもともとは作曲家であり、オペラも作つたのであるが、ワーグナーの『リエンツィ』『オランダ人』『タンホイザー』をきいて、自分の才能の限界を感じ、自作のオペラ上演をあきらめ、指揮者ワーグナーのよき助手に甘んじたのである。レッケルは15歳

のとき、パリで7月革命を直接体験し、以来すぢ金入りの社会主義者となつた。ドレスデンでの副指揮者の収入はすくなく、第1指揮者ライシガー (Carl Gottlieb Reibiger) の年俸が2000ターラー、第2指揮者ワーグナーで1500ターラーだつたのに対し、レッケルの給料は年600ターラーにすぎなかつた。子供が9人もゐて、生活は苦しかつた。レッケルは収入の少ない音楽の仕事よりは、経済学関係の読書に熱中し、熱つぱくワーグナーに社会主義思想を吹きこんだのである。

かうして、1848年をむかへる。この年2月、フランスでは選挙法改正をもとめて、市民がたちあがつた。当時フランスの有権者は、総人口の1%にもみたなかつたからである。国王ルイ・フィリップはイギリスに亡命し、共和主義政権が成立して、普通選挙がおこなはれた。これが2月革命である。この革命では、労働者の力が大きな働きをしたので、その代表者として、社会主義者ルイ・ブランも政府の1員となり、国立工場もつくられた。世界初の社会主義体制である。しかし、2ヶ月ごの4月の選挙で、社会主義勢力は完敗し、国立工場は閉鎖された。零細な自作農となつた元小作人が、自分たちの私有地の国営化をおそれて社会主義を拒否したからである。祖先いらい、小作農であつた者の私有地に対する執念は、異常ともいふべく、その亡霊は農地改革ごの日本にも生きてゐる。

2月革命はウィーンに飛火して、3月革命となり、ウィーン体制の指導者メッテルニヒは追放された。感激したワーグナーは、「ザクセンからウィーンの人々への挨拶」と題する長篇の詩をかき、この詩は、5月にオーストリアの新聞 (Allgemeine Österreichische Zeitung) に掲載された。その1節には、

Nun jauchz' ich auf aus voller Brust,

mein Zagen ist gehoben :

Drum muß ich nun mit heißer Lust

euch Wiener Helden loben !

Ihr habt die Frage recht erwogen,

euch macht sie kein Graun :

Das gute Schwert habt ihr gezogen,
den Knoten zu durchschau'n.

ワーグナーの革命詩よりやゝ遡つて、メッテルニヒ失脚の2日ごの3月15日、ドレスデンでも、デモがあり、3日ごの3月18日には、ベルリンとフランクフルトでバリケード戦がおこつた。3月31日、フランクフルトに国民議会のための予備会議がひらかれ、5月18日、ドイツ統一の問題と統一憲法(帝国憲法)の起草を審議するフランクフルト国民議会(Deutsche Nationalversammlung)が開催される。この議会には、ヤーコプ・グリムや歴史家ドロイゼン(Johann Gustav Droysen)など有名な学者も加はり、総勢やく800名からなり、いはゞ、当時のドイツの頭脳を集めたものであつたが、それは諸王侯の代表ではなく、国民の代表であつたところに、特質と限界とをもつてゐた。

1848年6月、チェコ(当時はオーストリア)のプラークに暴動がおこり、バクナーンがこれを指揮したのであるが失敗、バクナーンは同志レッケルをたよつて、ドレスデンに潜入した。ワーグナーはレッケルの紹介で、このロシアの無政府主義者と知合ふのである。バクナーンは巨象のやうな体軀、ゆつたりした物腰で、恐しい破壊思想をかたつたが、眼をわるくしてゐるワーグナーのために、ランプの光がまぶしくないやうに、大きな手で、一時間ものあひだ、光をさへぎつてくれるやうな、繊細なこゝろの持主でもあつた。

6月14日、ワーグナーは急進的な政治団体「祖国結社」(Vaterlandsverein)において、「共和主義の運動は王権にたいして、いかなる関係にあるか」と題する演説をおこなひ、その内容は、「ドレスデン新報」(Dresdener Anzeiger)の附録に、匿名で掲載された。こゝでワーグナーは、

「わが貴族諸氏は、もはや欲するがまゝに、われわれを奴隷とし、搾取することの出来る封建領主でないならば、すべての怒りを取払ふために、特権の残滓さへも、放棄すべきである」と、貴族階級の廃止を訴へるが、来るべき

体制として国王を戴いた共和制といふ中途半端なものを提案してゐる。これは、祖国結社内では共和制か、王制かの対立があつたのに対するワーグナーの一つの妥協案であつたのであるが、これもまた、ワーグナーの政治性の一面をしめしてゐるのであらう。バクーニンなどは、ワーグナーとくらべものにならないほど過激であり、いさぎよい。しかし、たとへば、バクーニンはドレスデン蜂起で、「敵」の建物はすべて焼きはらへ！といふ明解な指示をだしたがために、かへつて人々の反撥をくつてゐる。ワーグナーの発言は、これとくらべれば、歯切れがわるく、はなはだ、なまぬるいが、まさにその「欠点」のために、祖国結社でのワーグナーの演説は聴衆の喝采をまねいたのである。以後、ワーグナーは、貴族階級廃止主義者として、政府の要注人物となつた。

制裁措置は迅速だつた。たゞちに、『リエンツィ』は上演題目からはづされ、4月完成、12月初演予定だつた『ローエングリン』の上演も中止となつた。

状況を見るに敏なワーグナーは、このさい、ほとぼりがさめるまで、座をはづす方がよいと判断し、劇場に休暇ねがひをだし、ウィーンへの旅行に出かけた。7月9日から22日までである。しかし、ワーグナーは行先の選定に失敗した。ウィーンにいつたのは、自分の作品の上演の可能性をさぐるためだつた、とワーグナーはいふのであるが、3月革命いらい、革命、反革命のたえないウィーンに行つたのは、革命の同志との連絡のためだつたと、とられ、ワーグナーの立場はますますわるくなつた。

1848年夏、レッケルは政治運動のゆゑに、宮廷劇場副指揮者のちるをうしなつた。これでレッケルは自分の任務、すなわち革命家といふ任務を自覚し、「民衆新聞」(Volksblätter)と題する週刊新聞をだして、民衆の煽動にのりだした。「民衆新聞」の第1号がでたのが、1848年8月26日である。ワーグナーはこの新聞に3つの匿名記事を書いてゐる。

1848年11月12日—28日、『ジークフリートの死』の初稿が完成する。のちの『神々のたそがれ』のをはりでは、一切が滅亡するのに対して、この初稿で

は、愛が世界を浄化し、すくひ得るといふ現実的・楽天的色あひをしめしてゐる。ワーグナーの社会改革への期待の反映といはれてゐる。かうして、48年もくれ、いよいよ問題の49年をむかへる。

1849年1月、『ナザレのイエス』の草稿が出来あがつた。これは、結局は、作品にまでならず、草稿のまゝ残つたのであるが、革命期のワーグナーを考へるばあひに、しばしば言及される。ワーグナーが『ナザレのイエス』を朗読したとき、聴衆の1人であつたバクーニンは、

「テノールが『あいつの首をきれ！』、ソプラノが『首をくゝれ！』と歌ひ、さうするとバスが『火だ！ 火だ！』と、やれ」と、すゝめたと、ワーグナーは『わが生涯』に書いてゐる。

(4)

1849年3月23日、フランクフルト国民議会は、ドイツ帝国憲法（*Verfassung des deutschen Reichs*）を採択。3月28日、同議会は、統一ドイツ帝国の皇帝に、プロイセン国王フリードリヒ・ウィルヘルムIV世を推戴したが、4月3日、フリードリヒ・ウィルヘルムIV世は、これを拒否した。諸侯の手からでなく、人民の代表者集会（フランクフルト国民議会）から、さし出された帝冠はうけるわけにはいかない。国王は、この帝冠を、人々が自分を48年の革命につなぎとめようとする犬の首輪と見たのである。

4月8日、ワーグナーはレッケルの「民衆新聞」に、「革命」と題する無署名の文を寄せてゐる。それは、まづ、

「超自然の力がわれわれの世界をとらへ、古いレールから切りはなして、新しい軌道にはめ込まうとしてゐるかのやうに、おもはれる」と、はじまる。「超自然の力」（*eine übernatürliche Kraft*）といふ表現には、社会の変革を、人間の願望としてゞはなく、歴史の必然としての理解がふくまれてゐるであらう。さうして、つぎのやうにつゞける。

「われわれには、わかつてゐる。古い世界、それは崩壊し、そこから新しい

世界が誕生するのである。なぜなら、崇高な女神〈革命〉は、嵐のつばさに乗って轟然とやってくる…」

Revolution が女性名詞だからであらう、「革命」を崇高な女神とたゞへ、革命に熱狂してゐる様子がよくわかる。さらに、「革命」からの挨拶として、「強者と法律と財産」の粉碎、「1人の人間が、ほかの者を支配する一切の支配権」の粉碎を主張する。このあらゆる秩序の破壊を目ざす革命の賛美は、バクーニンからのうけ売りであらうが、それは、一じ的にせよ、バクーニンからつよく感化された結果である。

フランクフルトの国民議会で起草された帝国憲法承認をもとめる声に、ザクセン国王フリードリヒ・アウグストⅡ世は、だんこ、耳をかさうとしなかつた。いつもは優柔不断かにみえる国王にしては、めづらしい態度ともおもはれたが、それには、プロイセンからの圧力があつたのである。プロイセン国王フリードリヒ・ウィルヘルムⅣ世の帝冠拒否のち、プロイセン政府は、帝国憲法支持をきめたプロイセン下院を解散させ、各国もこの憲法を承認しないように要請してきたのであつた。

ザクセン国王フリードリヒ・アウグストⅡ世は、このさい、国民の要求を拒絶すれば、当然、暴動を予想しなければならなかつたが、王は自国の軍隊



とプロイセンからの援軍をたのみとしたのである。4月37日、王は上院、下院の両院を解散させた。レッケルの「民衆新聞」は発禁となり、レッケルは身の危険をさけるために、プラークへ逃走した。

プロイセンが帝国憲法阻止を各国に働きかけてゐる事実があきらかになり、ドレスデンでは、プロイセンの軍隊が進駐してくるといふ噂がながれた。5月2日、ワーグナーはプラークのレッケルにあてゝ、「皆は国王とではないにしても、いづれにせよ、結局は、プロイセンの軍隊と一と揉めあるのを覚悟してゐます。皆の心配は、要するに、革命の早すぎる勃発です」と、書いてゐる。のちに、この手紙が、レッケルのところで見つかり、当局によつて、ワーグナーと革命とのふかいかゝはりをしめす重要な証拠物件とされた。

いよいよ、5月3日（木曜日）である。以下、数日間の叙述には、作曲家シューマン夫人クララ・シューマン（Clara Schumann）の日記を資料にくはへる。（このころ、シューマン夫妻もまた、ドレスデンに住んでゐた。）この日、ドレスデンでは緊急をしらせる号音がなり、塔といふ塔の鐘がひびき、まもなく発砲の音がきこえた。ザクセン国王フリードリヒ・アウグストII世は、首都ドレスデンからの脱出をはかつたが、民衆は王の馬車の轆を折つて、王にとゞまるよう歎願した。民衆は兵器庫を占領しようと、そこへむかつてすゝんだところ、先に向うから発砲があり、デモの先頭にあつた何人かゝ、血をながして倒れた。かうして、ドレスデン蜂起（Dresdener Aufstand）の火蓋はきつておとされたのである。騒ぎをきゝつけたワーグナーも、兵器庫の方に走つてゆくと、丁度、負傷者がはこばれて来るのに出会つた。ワーグナーは人波におされながら、いつしか、市庁舎に来てゐた。そこには、黒赤黄の統一ドイツの旗がひるがへり、この蜂起の指揮をとる「防衛委員会」（Verteidigungsausschuß）が占拠してゐた。

5月4日（金曜日）、早朝4時、国王、王妃、大臣たちは、国民の滞留ねがひを無視して、汽船をつかひ、城塞のあるケーニヒシュタイン（ドレスデンよりエルベ河の上流、やく30km）へ逃走した。街には、バリケードがきづ

かれ、市庁舎には仮政府が成立した。仮政府は武力闘争を宣言。ワーグナーは「民衆新聞」の印刷所で、「君たちはわれわれと共に、外国の軍隊に立ち向ふか?」と書いたビラを刷らせ、バリケードをのりこえて、王宮前広場に待機してゐたザクセン軍の兵士たちに、自らこのビラをくばつて廻つたのである。

各町内には、自警隊がつくられ、武器をもてる男性は全員、革命軍に参加するように呼びかけてきた。シューマンの家にも、自警隊員がおとづれ、革命軍に入るように、要求してきた。クララは、「夫は家にゐない」とことわつたが、自警隊員は納得せず、家探しするとまでいつて、おどした。

幕末の戯作者や浮世絵師は、「浦賀に黒船が来ようが桜田門で大老が暗殺されようが」そんなことは、自分たちの「与り知つた事ではない」としたといふが（永井荷風『花火』）、シューマンもまた、デモの群衆から怪我人が出ようが、国王が首都から逃げ出さうが、市庁舎に臨時政府が出来ようが、さうした事件は自分とは関係のないことであるとしたのであつた。ワーグナーとシューマン、ドイツ音楽界を代表するこの2人が、1つの政治事件に対してとつた態度は、文字どほり、対蹠的であり、わたしたちの興味をひく。

5日から6日にかけて、ワーグナーは夜どほし、物見の役をはたしてゐる。すなはち、十字架教会の95メートルの塔にのぼり、そこから戦況をいちいちメモし、小石をその紙片でくるんで、下におとして連絡したのである。

6日（日曜日）、つひにプロイセン軍がドレスデンに到着、武器も不十分な、烏合の衆の革命軍は、それできへ勝味がうすかつたのに、いよいよ苦しい立場におひこまれてゆく。一方、革命の報をきいて、レッケルがドレスデンに舞戻つてきたのも、この日であつた。

7日（月曜日）、ワーグナーは、偶然、レッケルと出会ひ、わづかなことばをかはしただけでわかれたが、これが以後13年間の離別にならうとは、もちろん、2人とも、まだしらない。ワーグナーはこの日の午前、妻のミンナと鸚鵡と愛犬をつれて、姉クララ夫妻の住むケムニッツ（いまのカール・マルクス・シュタット、ドレスデンの西南、やく70 km）へむかつて出発し

た。

なほ、同日、旧歌劇場が焼失したのであるが、一じ、ワーグナーが放火したとの噂がながれた。しかし、のちにこれは、ワーグナーはワーグナーでも、リヒアルトではなく、ヴォルデマル・ワーグナー (Woldemar Wagner) といふパン屋が犯人とわかつたため、ワーグナーはやつと、ぬれぎぬをはらすことが出来たのである。

8日(火曜日)未明、レッケルは町をはなれようとしたところを、暴動の首謀者として逮捕され、一たんは、死刑の判決をくだされたが、のち、無期懲役に減刑され、1862年になつて、やうやく自由の身となつた。前日、家族を避難させるために、ドレスデンを去つたワーグナーは、この日さつそくもどつて来たが、ワーグナーがそこで見たものは、革命軍の敗北であつた。

9日(水曜日)、軍隊が市中を砲撃するとの噂がひろまり、市民の避難がはじまつた。それより先、早朝、ワーグナーはバクニン、ホイプナー (Otto Leonhald Heubner) など、こんどの蜂起の指導者たちと、ドレスデンをはなれ、フライベルク (ドレスデンとケムニッツの中間地点) にむかつた。こゝで、ワーグナーはバクニン一行とわかれる。その夜、ホイプナーとバクニンは逮捕、(レッケルとおなじく) 死刑の判決をうけるが、のち減刑、バクニンは、1851年、ロシア政府にひきわたされ、シベリア流刑となるが、1861年に脱獄し、日本を経由してロンドンにわたつた。

さきにはレッケル、さうして、こんどはバクニン、ホイプナーと逮捕された。革命家にとって、「逮捕」は政治的能力の低さの何よりの暴露となる。ひとりワーグナーのみが逮捕をまぬかれたのであつた。これを単なる偶然と見るむきもあるが、しかし、おそらくは、より少なく偶然であつたとおもはれる。王宮前広場でピラをくばりながら、狙撃されなかつたことゝいひ、こんどのことゝいひ、それらはワーグナーの「抜目のなさ」を物語つてゐる。

辞書で „politisch“ といふ語にあたつてみると、派生的意味のところに „auf ein Ziel gerichtet, klug u. berechnend“ と説明があり (Duden 6冊本)、独和辞書にも、②として「抜目のない」といふ訳がついてゐる (三修

社『現代独和辞典』)。「抜目のなさ」が政治能力の一部にふくまれるならば、これもまた、ワーグナーの一つの政治性をしめしてゐる、といつても、あまり大きな過ちをゝかしてゐないやうにもおもはれる。

バクニンたちとわかれたワーグナーは、その日、ケムニッツの旅館にとまり、翌日、姉クララの家をたづね、10日のよる、クララの夫ハインリヒ・ヴォルフラム (Heinrich Wolfram) がワーグナーをケムニッツの西北50 km (ライプツィヒとケムニッツの中間地点) のアルテンブルクまで同道し、ワーグナーはそこから郵便馬車にのつて、ワイマルにのがれ、ワイマルでは、リスト (Franz Liszt) がむかへてくれたのである。

この日 (10日)、ドレスデンの様子はどうかであつたか。クララ・シューマンの日記によると、

「荒廢のありさまを書くことは、ほとんど言語に絶するばかりである。家々には何千個といふ弾丸の穴があり、壁は剥れ、旧歌劇場はすつかり焼けおちてゐた」とあり、つゞいて、ワーグナーへの言及がある。

「楽長ワーグナーは共和党のなかで活躍し、市庁舎から演説をおこなつたり、指示してバリケードをつくらせたり、そのほかいろいろの働きをしたといふことである」

5月16日、ドレスデンでは、ワーグナーへの手配書が公表され、19日には、「ドレスデン新聞」にも掲載された。その事由は、楽長ワーグナーが、このたびの騒乱に、「ふかく関与」してゐたゝめであり (wegen wesentlicher Theilnahme)、こゝろあたりの人は、たゞちに知らせる欲しい、といふものであつた。ワーグナーは「ベルリンの教授 ウェルダール」 (Professor Werder aus Berlin) と名まへをかへ、各地を転々としたあと、最終的には、スイスのチューリヒにおちついた。

(5)

トーマス・マンはワーグナーの作品とゾラの『ルゴン・マカール』とを対

比して、両者には多くの共通するものがあるが、しかし、決定的な差異は、ゾラが政治や社会につよい関心をしめすのに反し、ワーグナーには、それがない、といつてゐる (*Richard Wagner und ›Der Ring der Nibelungen‹, Leiden und Größe Richard Wagners etc.*)

ワーグナーの作品には、それほどに、政治的・社会的な主題が見られないか、どうか。むしろ、ワーグナーはしばしば政治社会問題を作品にとり入れてゐるのではないか、とも見られないではない。

まづ、『恋愛禁制』である。このオペラは1836年、ワーグナー23歳のときの作品で、作者の第2作めにあたる。場所は、シチリアの首府パレルモ。寛大な国王が外国に旅行に出て留守のあひだ、王の代行となつたドイツ人フリードリヒは、法律をきびしくして風紀をとりしまらうとするが、失敗する。国王の国民にのぞむ態度、社会秩序をたもつための法律の運用のしかた、など、すでに初期の作品において、政治社会問題への関心の萌芽がみとめられる。

つぎに、『リエンツィ』。舞台は14世紀なかばごろのローマである。リエンツィは貴族の横暴をおさへて、自ら護民官となり、市民に自由をあたへる。しかし、貴族、市民の双方から恨をかひ、リエンツィの目ざした社会改革は、失敗する。この作品が、社会の変革をもとめるといふ強い政治性を主題としてゐることは、あらためていふまでもない。

第3に、『タンホイザー』である。このオペラは、一見、政治とは無関係のやうであるが、かならずしもさうではない。1972年のバイロイト音楽祭で、演出を担当したゲッツ・フリードリヒ (Götz Friedrich) は、『タンホイザー』を「専制社会での孤独な芸術家の物語」(スケルトン『バイロイト音楽祭の100年』266頁)と解釈してゐる。作者のワーグナーは、おそらくは、さういふ意図をもつて書いたのではないであらう。しかし、出来上つた作品と作者の意図とは別物であり、わたしたちに、より大事なものは、作品のあたへる効果であつて、作意ではない。この観点から、『タンホイザー』もまた、政治的主題の作品であるといへる。

第4に、『ナザレのイエス』。これは作品にまで成熟せず、構想の段階でを

はつたのであるが、ワーグナー論では、よく引合ひにだされる。この草稿のなかで、イエスは（リエンツィのやうに）社会改革者としてゑがかれてゐる。法律にまもられた所有権から、罪が生ずるのであり、法律がなければ、罪もなくなる。イエスは、人間の法律によらずに、神の愛によつて生きるやうに説き、死を通しての救済として、自ら十字架につくのである。

第5に、『ニーベルングの指環』である。この作品を徹頭徹尾、政治的に解釈したのは、バーナード・ショーであつたが（Barnard Shaw : *Wagner-Brevier*），以下、ショーに倣ひながら私解をしめしてみる。『ニーベルングの指環』は、小人アルベリヒがラインの河底から、黄金を略奪する場面からはじまる。アルベリヒはこの黄金から1つの指環をつくつた。この指環の持主は世界を征服できる。アルベリヒは指環の力を利用して、小人族を使役し、富を搾取する。アルベリヒは資本家であり、小人族は労働者階級である。一方、神々の長であるウォータンは、自己の権力を誇示するために、巨人たちに壮麗な宮殿をつくらせる。しかし、たちまち、巨人たちへのしはらひに困り、わる知恵の神ローゲととも、地下のくへおろりて行つて、アルベリヒから、黄金と指環とを、だましとる。このとき、アルベリヒは指環にのろひをこめたため、この指環の所有者は死をまねかれられなくなつた。古来、神聖であるべき国王が人民から富をだましとつた例は、枚挙にいとまがない。ここでも、神々の長であるウォータンが、小人から富（黄金）と権力（指環）とを奸計によつてまきあげてゐる。アルベリヒやウォータンが、略奪して富と権力とを手にいれてゐるのは、プルードンの「財産とは盗み」であるとする思想からの影響であるといはれてゐる。

かうして、世界（社会）は、どうしようもなく墮落してしまつた。そこに救世主としてあらはれるのが、ジークフリートである。ジークフリートは、ジークムントとジークリンデといふ双子の兄妹の結婚からうまれる。ウォータンの妻である法の神フリッカから見れば、兄と妹との結婚は、ゆるすべからざる罪である。救世主は、ふるい世界の罪からうまれる。ジークフリートも罪の子として、ふるい慣習にしばられぬ自由人である。ジークフリート

は、まづ、そだての親のミーメをころし、それから黄金と指環とをまもつていた大蛇を、いとも簡単にころしてしまつた。バーナード・ショーはジークフリートをアナキストとみて、「作品のなかのバクーニン」と解してゐる。はじめ、ジークフリートは「おそれ」といふものを、しらない。自分のころの欲するがまゝに驀進する。その行動は、果敢であり、爽快である。しかし、ジークフリートも指環といふ権力を手にしたかぎり、没落はまぬかれぬ...

『ニーベルングの指環』には、さまざまの解釈が成立する。そのうち、どれか1つを正しい、といふことは出来ない。いくつかの中から、1つをえらびだして、それを「正しい」とし、ほかはすべて間違つてゐるとするのこそ、この際、もつとも間違つた態度である。ワーグナーの孫ヴィーラント・ワーグナー (Wieland Wagner) は、いろいろの事情から、祖父の作品を出来るだけ非政治的に解釈しようとした。当然、『指環』の解釈もまた、非政治的である。ヴィーラント・ワーグナーは『指環』を、人間の内面の葛藤と見ようとしたのである。しかし、ヴィーラント・ワーグナー演出のあとをうけて、1976年に登場したシェロー (Patrice Chéreau) は、『指環』を、より政治的に解釈しようとしてゐる。ラインの乙女たちは街娼となり、アルベリヒは金縁めがねをかけた高利貸しといふ身なりである。この演出は、大筋においては、バーナード・ショーにつらなるものを、もつてゐるであらう。

(6)

芸術家の政治性をかんがへるにあつて、出来上つた作品が、第3者によつて政治的に利用されるばあひも、考慮にいれなくてはならない。それは作者本人の関知するところではないが、作者の政治性をしめす有力な証拠となるであらう。

この点からワーグナーを見ても、ワーグナーはきはめて政治的である。まづ、ヒトラーがワーグナーに心酔し、ナチスがワーグナーを利用したこと

は、ひろく知られた事実である。ヒトラーとワグナー作品との出会いは、ヒトラーが20代に、リンツで『リエンツィ』を見たときにはじまるとされてゐる。ヒトラーはこのオペラを見て、自分もリエンツィのやうな民衆をまもる護民官たろうとした、といふのである。もし、この通りならば、これは『リエンツィ』の政治性を物語るエピソードである。あるひは又、ヒトラーがはじめて見たワグナーのオペラは、(『リエンツィ』ではなく)『ローエングリーン』だつたともいはれる。『ローエングリーン』ならば、ヒトラーはそこに強烈なナショナリズムを見たであらう。『ローエングリーン』では、国王ハインリヒが東からのハンガリーの侵攻をふせぐために、ブラバント地方に募兵にきたところから幕があがるのであり、ドイツ各国が1つとなつて、異民族とのたゞかひにそなへるといふ歴史的事実をふまへて、大へん愛国的となつてゐる。たとへば、つぎの台詞、

国王「いまこそ、わが国の敵よ、寄らば寄れ、

われわれは勇敢にむかへ撃たう。

荒涼不毛の東からの

敵の侵入も、もはやゆるさない。

ドイツのために、ドイツの剣、

かくて国威を發揚せよ！」(第3幕第3ば)

ヒトラーのはじめてのワグナー体験が、『リエンツィ』であつたにせよ、または、『ローエングリーン』であつたにせよ、とにかく、ワグナーの芸術は、ヒトラーをヒトラーたらしめるために、役立つたのである。『リエンツィ』も、『ローエングリーン』も、ヒトラーにあたへたものは、しばしば芸術がその鑑賞者にもたらす休息ではなく、これらのオペラは総統への道を、ヒトラーに鼓吹したのであつた。

ヒトラーは『マイスタージンガー』を100回以上きいたらうとか、「ヒトラーは1939年、ワグナーの音響のなかで、世界戦争を開始した」(Peter Viereck: *Hitler und Richard Wagner*)とか、または、「ヒトラーは自分を竜と戦ふジークフリートに見立てゝゐた」とか(ルイス・シュナイダー『アドル

フ・ヒトラー』), ワグナーとヒトラーとを、むすびつける発言は、いくらでも、拾ひあつめることが出来る。

ヒトラーにとつて、ワーグナーは万事、都合がよかつた。第1に、ゲルマン神話を素材としてをり(『指環』), 第2に、しばしば愛国的なことばが登場する。『ローエングリン』が、さうであり、さらに熱烈なのは、『マイスタージンガー』である。そのなかでも、「たとひ神聖ローマ帝国は雲散霧消しようとも、さいごにこの手にのこるもの、それは神聖なドイツ芸術だ！」(第3まく第5場)などは、大へんによろしい。第3に、ワーグナーは『音楽におけるユダヤ性』といふ文章をかいて、はつきりと反ユダヤ主義を表明してゐる。これもヒトラーにとつては、打つてつけである。第4に、ワーグナーが革命に関係してゐるのもいゝ。ナチスも1923年11月、ドイツ語で Putsch と称する革命ごつこのやうなものもやつてゐる。さうして、双方とも、ワーグナーもナチスも、反共産主義である。ワーグナーは、1848年6月、「祖国結社」での講演「共和主義の運動は王権にたいして、いかなる関係にあるか」で、貴族階級の廃止をうつつあへながらも、「財産と利益とを数学的に等分化する」共産主義は、「まつたくつまらない、無意味きはまる」教説として、しりぞけてゐる。ナチスの宣伝ビラには書いてある、「マルクス主義は死ぬ、社会主義が生きるために！」(Der Marxismus sterbe, damit der Sozialismus lebe!)

バイロイト音楽祭の開催年は、もともと2年つゞけて1年やすみであつたが、ナチス時代、年号でいへば、1936年のベルリン・オリンピック以ては、44年まで、毎年開催が可能となつた。バイロイト音楽祭は、開設以来、慢性の赤字にくるしんでゐたのであるが、ヒトラーはこの音楽祭に年間5万マルクの援助をあたへ、そのうへ、税金を免除する特別措置までおこなつて、優遇してゐる。ワーグナーの息子ジークフリート・ワーグナー(Siegfried Wagner)の早逝ご、ジークフリート夫人ウィニフレッド・ワーグナー(Winifred Wagner)が、バイロイト祭の主催者となるが、ウィニフレッドは、ちかいうちに、ヒトラーと結婚するのではないか、といふ噂まで立つた。

毎年のバイロイト音楽祭の期間中、ナチスの幹部は一斉にバイロイトにおもむいたから、このあひだだけは、首都がベルリンからバイロイトに移つたやうにさへ見えた。党の幹部ばかりではなかつた。前線の兵士、負傷兵、それに軍需工場の労働者など多数が招待されて、「ゲルマン精神を謳歌した」オペラを見せられ、洗脳されて、帰つたのである。

そのなかでも、1936年のベルリン・オリンピックの年、オリンピックの前後にわけて開催されたこの年のバイロイト音楽祭こそ、オリンピックとともに、ヒトラーがナチス・ドイツを世界に誇示する最大の行事であつた。この年の出し物は、『指環』と『ローエングリーン』と、さうして『パルジファル』が選ばれた。

1945年5月1日、ラヂオは「ジークフリートの葬送曲」を流して、ヒトラーの死をつたへた。1933年3月21日、第3帝国成立の祝賀会が『マイスタージンガー』前奏曲で開幕したのと、はからずも、首尾をあはせる結果となつたのであつた。第3帝国は、ワグナーにはじまつて、ワグナーに終つたのである。

(7)

ある芸術家の政治性を云々するばかり、その内容はおよそ、3つに大別して考へられるであらう。

- (1) 政治運動への直接参加
- (2) 政治的・社会的問題を主題とする作品の創作
- (3) 書かれた作品の、第3者による政治的な被利用度

かう見てみると、ワグナーはその3つのいづれにおいても、きはめて政治的であつたこと、その1つ1つについて、概要をのべたとほりである。しかし、一般に、ワグナーは「非政治的」といはれてゐる。なぜ、さうなのであらうか。

第1に、ワグナー没後、間もなくのころは、チェンバレン (Houston

Stewart Chamberlain) など、ワーグナー神格化を目ざした人々は、思想的に「右」にぞくし、本尊のワーグナーを、なるべく「左」になじませたくなかつたのである。ヘーゲル左派のフォイヤーバハ (Ludwig Feuerbach) とワーグナーとの関係も、チェンバレンは出来るかぎり両者のむすびつきを稀薄に考へたかつたので、ワーグナーはフォイヤーバハから、わづか 2, 3 の概念用語を借用したに過ぎない、と書いてゐる (Chamberlain: *Richard Wagner*, S. 136).

また、1872年の第1次インターナショナル・ハーグ大会で、マルクス、エンゲルとむすびつかない「社会主義」は、「空想」とされたから、ワーグナーのやうに、反マルクスであるプルードンの影響をうけ、マルクスからバイロイト音楽祭について、「国家音楽師リヒャルト・ワーグナーのバカ祭り」といふお墨附まで頂戴した者は、「革命」に参加しようが、どうしようが、それらはすべて「空想的」思想・行動であり、所詮「非政治的」とされる。たとへば、ヴェステルンハーゲンも、ワーグナーを非政治的と判断する材料の1つとして、ドレスデン時代のワーグナーの蔵書に、マルクスやエンゲルスの著書が1冊もなかつた、とわざわざいつてゐるのは、「政治性」とマルクスとの関係をしめしてゐる例となるであらう。

第3に、戦後は、いふまでもなく、人々があらゆることからナチス色の払拭に懸命になつた時代である。ナチスとのむすびつきは、戦後においては、「死」の宣告であつた。ヴィーラント・ワーグナーは、「1945年以後、19世紀的傾向をもつとも特徴的に体现してゐるワーグナーの作品はすでにその意義を失つた、とひろく信じられるやうになつた」(スケルトン『バイロイト音楽祭の100年』の序文)と言つてゐるが、ヴィーラントの眞の危惧は、「ナチスにもてはやされたワーグナーは、すでにその意義を失つた、とひろく信じられるやうになること」だつたに違ひない。1951年、再開されたバイロイト音楽祭で、ヴィーラント・ワーグナーは祖父ワーグナーの作品を徹底的に非政治的に解釈し、それを「アイスキュロスやシェクスピアやカルデロン」の作品のやうに、普遍的な人間存在の形象化と見たのである。ヴィーラントの試

みは成功し、あれほどナチスになじんだワーグナーは、戦後、見事に再生した。ヴィーラント・ワーグナーの新しい演出がなかつたら、ワーグナーはとうの昔に、抹殺されてしまつてゐたかもしれない。

このやうに2重3重に脱政治化へ方向づけられてゐるところに、「非政治的ワーグナー」の根拠があるであらう。 (大尾)

Über das Politische bei Richard Wagner

Yoshihiro Ito

Es wird allgemein anerkannt, daß Richard Wagner wesentlich unpolitisch war. Wenn er auch im Jahre 1849 in Kontakt mit den Rebellen gestanden habe, so habe er sich doch nur einen utopischen Zustand erwartet, in dem seine Opern aufgeführt werden dürften. Seine Handlung sei durchaus künstlerisch – nicht politisch – motiviert gewesen.

Was ist denn bei einem Dichter politisch zu nennen? Die Frage läßt sich von den drei folgenden Standpunkten aus betrachten.

- 1) Er ist politisch aktiv.
- 2) Er schreibt eine ein politisches Thema behandelnde Dichtung.
- 3) Sein Werk wird von einem Anderen für die Politik ausgenützt.

In einem jeden dieser Sachverhalte scheint Wagner als politisch bezeichnet werden zu können. Warum kann er trotzdem als unpolitisch gelten? Ein Beispiel: Seit dem Wiederbeginn der Bayreuther Festspiele im Jahre 1951 hat sein Enkel Wieland Wagner die Opern des Großvaters durch und durch unpolitisch interpretiert und inszeniert, weil er das nazistisch Angehauchte aus dem Werk Wagners ausmerzen mußte. Ohne diese Darstellungen hätte Wagner nicht in der Nachkriegszeit weiterleben können.

Nicht etwa, daß Wagner unpolitisch war und ist. Man wünscht, er möge es sein.